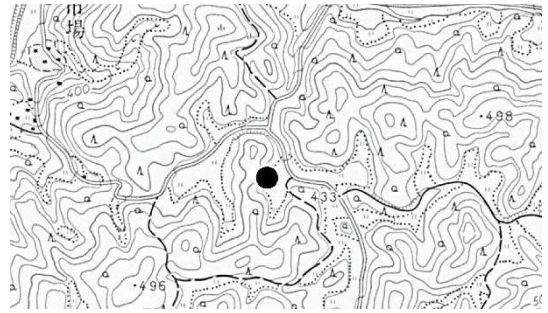


かきねだ
柿根田遺跡

所在地 豊田市下山田代町柿根田地内
(北緯 35 度 1 分 31 秒
東経 137 度 19 分 1 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設



調査地点(国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)

用地造成事業

調査期間 平成 24 年 6 月～平成 25 年 3 月

調査面積 8,000 m²

担当者 成瀬友弘・石井香代子・米満武・本田英貴

調査経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う事前調査として、愛知県企業庁より委託を受けて実施した。

立地と環境 本遺跡は、谷間の旧耕作地と山林に立地しており、現在の状況は水田及び山林である。現在の標高は海拔 430～450m 前後である。周辺の遺跡として、約 1.4km 北方に代官屋敷遺跡(縄文、中世)がある。

調査の概要 本年度の調査面積は 8,000 m²あり、調査は主に杉を植林した山林地域の A 区・B 区と、谷間を圃場整備した水田地域の C 区・D 区の 4 調査区に分割して実施した。山林地域だった A 区では、縄文時代から古代・中世の遺物を検出し、主要な時代は縄文時代である。B 区からは、近世の馬と思われる獣骨が出土した。水田地域だった C～D 区では、縄文、古代～中世の遺物を検出したが、主要な時代は中世である。

12A 区 A 区は東南斜面地にあたる場所で、調査面積は 3,350 m²であった。上方は傾斜がきつく表土直下で岩盤や地山になり、包含層や遺構は認められなかった。この斜面の裾の緩傾斜地に包含層が広がり、遺物や遺構も主にこの緩斜面で検出した。調査は古代から中世にかけての上層と縄文時代の下層の 2 面で行った。

上層では傾斜変換点付近で直径 0.8m 前後の時期不明の土坑を多数、検出している。配列の状況や掘り込まれた深さなどからこれらは一連のものともみられ、建物があつた可能性が考えられる。また、それより下の緩斜面でも大小、多数の土坑を検出した。うち数基は埋土の堆積状態や平面形、灰釉陶器の破片が出土したものもことから古代の墓の可能性もある。これら墓とみられる隅丸方形の土坑は、5 基検出している。

下層では縄文土器を埋納していたとみられる土坑の他、大小の土坑や土器、石器などを検出している。土器の多くは中期後半のものであり、その他に早期の押型文土器が少数出土している。

なお、上記に加え表土直下で近世以降の炭焼窯 2 基とそれに伴う炭化

物の入った土坑を検出している。

12B区

B区はA区の南に続く地区であり、便宜上地区分けをしたが、A区からの連続した斜面地である。調査面積は1,200㎡である。A区に比べ傾斜の急な斜面がほとんどを占め、緩斜面は裾に多少みられるのみである。ここではA区のような土層の堆積はなく、1面の調査とした。

調査では大小の土坑を検出しているが、そのほとんどが風倒木痕とみられる。その他の土坑に関しては遺物が無く、時期決定や性格の把握は難しい。なお、調査区中央付近の土坑から近世の馬の顎骨が出土しているが、共伴する遺物は無かった。

これらの遺構の他に、斜面の途中にある平場で炭焼窯3基を検出した。斜面にできた小さい平場を最大限活用するように、3基の窯が切り合いながら作られていた。時期は出土遺物などから、最も新しいもので戦後に作られたとみられる。

12C区

C区は元々水田で、調査面積は1,700㎡である。南、北西から流れる3本の自然流路が見られ、これらは調査区北西部と北東部で合流する。地山は花崗岩の風化によって形成された青灰色の砂層であり、表土を除去すると現れる。流路では、地山の上に礫を多く含む砂層が堆積し、その上に有機物を多く含む黒褐色シルト層が見られる。調査区北西部の流路の合流点で、集石遺構を確認した。遺構は最大幅3m、最大長6m程の直角三角形を呈し、直径0.2~0.3m程の礫が敷かれている。礫は平たいものを選択して置かれていると考えられる。礫の間には、有機物を多く含む黒褐色シルト層が入り込む。この集石の用途は不明である。時期については不明であるが、流路の対岸にあたる地点で、有機物を含む層から後述する灰釉陶器が出土している。

遺物としては、調査区北東部の流路の合流点付近で、有機物を多く含む黒褐色シルト層の下部から、底部の表と裏に「時」の異体字である「月寺」と書かれた墨書灰釉陶器が出土した。遺物の状況からほぼ原位置を保っていると思われる。また、調査区を南から流れる流路から、底部の裏に「○」と書かれた墨書山茶碗も出土している。摩耗具合からみて、流れ込んできたものである可能性が高い。縄文土器も流路の底から出土しているが、原位置を保っていない。

12D区

D区はC区の北東に位置し、調査面積は1,750㎡である。D区の南東から北西へ1本の自然流路がみられ、隣接するC区からの流路と合流する。流路の合流地点で堰状遺構を検出した。堰は長さ約1m・前後の矢板と、長さ約2m前後の横木を交互に組み込んでいた。横木には長いもので、長さが6m以上あった。流路の西1/3くらいからは、矢板と横木は検出できなかった。流路から、灰釉陶器、山茶碗が出土しているが、堰状

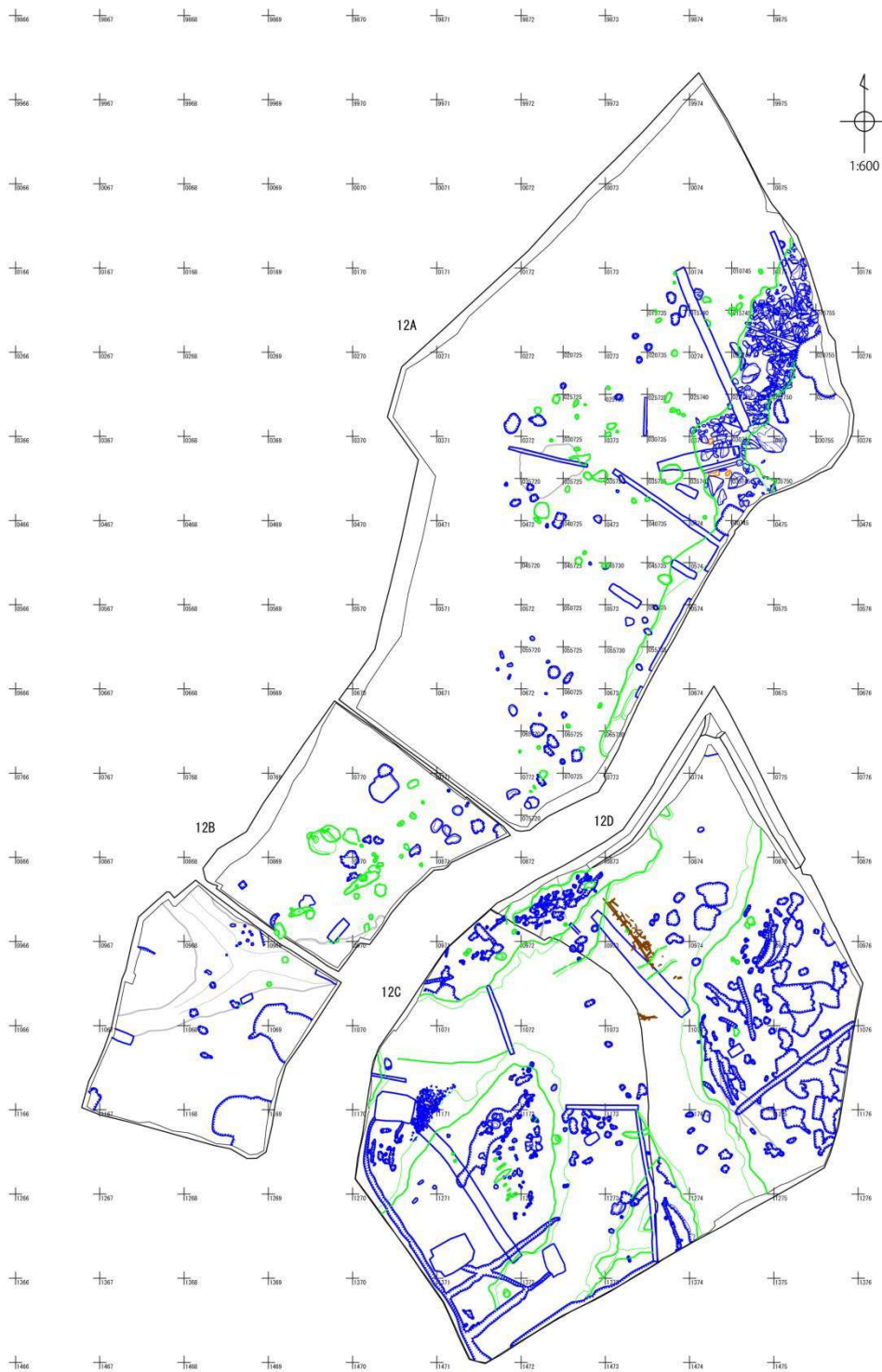
遺構構築後の堆積物からは、中世の山茶碗の破片が出土しており、堰状遺構が築かれたのはそれ以前と考えられる。

さらに調査を進めて矢板と横木を取り除くと、この堰状遺構の下から古い堰状遺構を検出した。長さ約 1~2m・の板材と、枝がついた自然木を横木に利用して川をせき止める状態になっている。矢板は検出されなかった。また、矢板の上流部から、長さ約 0.5~1.5mの加工された板材が数点出土したが、堰状遺構との関係は今後検討を要する。

まとめ

本遺跡は斜面部で縄文時代の遺構とそれに伴う遺物を検出した。また古代から中世にかけて流路を利用しその周辺で活動していた人々の痕跡を見ることが出来た。

時代が異なっても流路の周辺に集まり利用していた様子がうかがえる。特に古代以降の山間部の小河川の利用の一例がこの遺跡で提示できたことは意義深い。
(石井香代子)



柿根田遺跡 遺構図 (1:600)



柿根田A区上層 091SK (南から)



柿根田A区下層 257SK (北東から)



柿根田B区 284SK 検出状況



柿根田C区 018SX 検出状況 (北から)



柿根田C区 墨書灰釉陶器
X線写真 (内面)



柿根田C区 墨書灰釉陶器
X線写真 (外面)



柿根田 C 区 墨書灰釉陶器出土状況



柿根田 D 区 320SX 検出状況



柿根田 D 区 309NR 板材出土状況